

たくみ

Craftsmanship

特集 谷道和博吹きガラス展

第18号

日韓の間の孤島 竹島を友好の象徴へ

今年「日韓友情年二〇〇五」というのに、島根県議会の竹島領有宣言をきっかけに両国の間にギクシヤクとした関係が生まれ心が痛む。すでに数多くの交流行事が中止になったという。

日本民藝館も、ソウル市立歴史博物館で「日本の中の韓国民画」展を九月六日から共催することになっている。

よもやこれが中止になることはないと思うが、日韓の、倭国と三韓の時代からの千八百年にも及ぶ長い交流の歴史を省みると、私は「竹島」の、両国を固く結ぶ絆や証人としての位置と重みに思いをいたさざるをえない。

竹島は島根の隠岐島と鬱陵島のほぼ中間にある、日比谷公園ほどの小さな火山島である。広辞苑によれば一八四九年フランス船アンクールが発見、アンクール島と命名、一九〇五年日本が竹島と改名し隠岐諸島に属さしめたとあるが、これは誤解といっている。

竹島は古くから両国の漁民にとつてアシカなどの漁場であり、非常時の避難の島としても利用されてきた。江戸時代後期、幕府の隠密間宮林蔵が抜荷探索のため調査したとの話もあるが、竹島が国から注目されるに至った何よりの理由は日露戦争の勃発であった。

満州と朝鮮の権益をめぐってロシアと対立した日本は、一九〇四年二月八日朝鮮の仁川に上陸、二月十日、ロシアに宣戦を布告する。そして日本海の要衝にある竹島の領有を宣言したのであった。このことは同時に竹島問題が朝鮮人にとつて、このあとの日本による朝鮮併合へとつながる象徴的な事件として、長く記憶されることになった。

第二次大戦後、独立を達成した韓国は李承晩大統領によつて竹島(韓国名独島)の回復を宣言し今日に至る。だが古代から多くの人々が竹島を目印として朝鮮と日本の間を往来したことを思うと、竹島こそ友好の証として両国の共同利用ができないものかと思わざるをえない。

(志賀直邦)

たくみ企画展

谷道和博吹きガラス展

会期 平成十七年五月二十八日(土)～六月二日(木)
五月二十九日(日)は営業いたしません。
会場 たくみ二階サロン

営業時間 十一時から十九時まで(日曜日・最終日は十七時半まで)

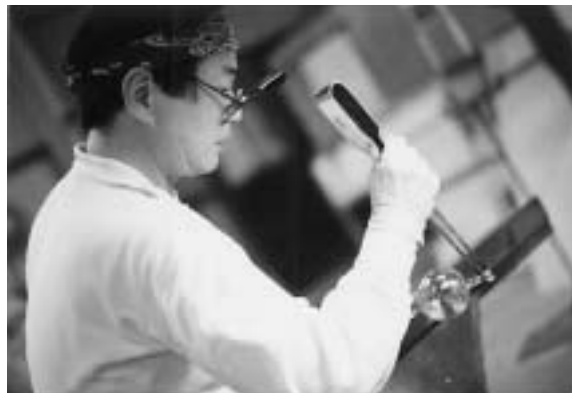


冷酒杯とゴブレット

都会的な器の楽しさ

谷道さんは東京の生まれである。だからという訳ではないが作風はモダンで、軽快である。学校を出て一九七〇年に各務クリスタルに入り吹きガラスを始め、九年後に横浜にガラス窯を築いた。会社の仕事と作家活動と、二足のわらじである。

会社は八六年に退社、三年後に千葉の小見川町に工房と窯を移し制作活動に専念している。



谷道和博さん

作るものはすべて実用の器である。だが谷道さんのガラス器には、量産の仕事から学んだ技術と彼自身の才能とが上手く融け合って、ひとつひとつに存在感があつて楽しい。食卓で料理をより引き立たせることも受けあいである。ぜひご覧いただきたい。(S)

昔の「たくみたより」から

鈴木 訓治

たくみの開店したのは昭和八年十二月も半を過ぎた頃であった。当時の銀座西通りといえ、行き交う人影もまばらであった。ことに夜は薄暗くまったく淋しい裏通りと云う感じで、広い道の真ん中をただ市電が音を立てて時折走るくらいのものであった。白壁の中ほどにある庇から諸国民藝と紺地に白く染め抜いた旗が、師走の風に吹かれていた時を思い出す。

現在では八咫屋（額縁）、吾八（郷土玩具）、ギャラリー工藝、中央公論花の店といった専門店が次々に出来た。阿波屋（履物）、小林時計店、江木写真館、荒川装束、Aワン（レストラン）等の老舗は古くからあった。特殊なあらゆる方面の店がここに集まり、軒を並べたなら随分面白い特別な通りが出来、一つの名所とさえなることだろう。

繁華な表銀座の雑踏から遁れて、この西銀座に流れってくる人々の群れも近年非常に多くなってきた。落ち着いてホットした気持ちで歩ける通りである。

*

各位のご援助によつて「たくみ」もここまで成育したことを先ず感謝せねばならない。二、三年前と比較しても格段の進歩をした。仕事の範囲も拡大された。日々の来客者も多く絵画、政治、演劇、映画、音楽関係の人々や、大使、公使館からの外国人も相当多い。贈り物や本国への土産物として喜ばれている。料理店からも量のまとまった注文もあり、ここから新しい形も生まれてくる。一步一步実用価値も認められてきた。しかし全体から見ると、一個一個一般家庭に持ち運ばれるものが一番多い。ことに若い学生方が下宿でも使われ

るものか、灰皿、飯茶碗、皿などを求められるのが目立ってきた。また出版関係では限定版とか、特装本などに和紙の利用多く、一流書店よりの注文も増えた。

*

遠くは朝鮮、台湾、北海道、東北地方から上京せられた人々、または関西方面からの新橋駅に下車された人々のその足で朝早く来店されることも多い。

台所道具があると思えば、下駄や箒、塵取りまである。壁面には様々の模様の、のれんがかかっている、その下には花瓶や食器一式の陶器も陳列、棚には今時珍しい呉服類まであるかと思えば階段には蓑や笠までぶらさがっている。たくみ屋さん（近所ではこう呼んでいる）は何屋さんだろうか、隣近所から不思議な存在として見られていたが、段々親しみも出来て、この頃は幼い子供達が遊びに集まってくる。二階の催物場は町会の集まりにも利用し、つい先日にも新体制の隣組の常会をも開いた。

茶碗考

瀧田 項一

ひとびとが、意外に無関心なことは、日に三度厄介になる飯茶碗のことである。

例えば、湯呑やぐい呑には比較的に興味を持ち、使い易いとか使い難い、或いは手ざわりが良いとか悪いとか、結



藍彩マカイ (沖縄)



飛び鉋茶碗 (小鹿田)

構その談義に花が咲くものである。まして、稀に桐箱の中から取り出して用いる抹茶碗にいたっては殊の外うるさいものである。どこのなんのなに兵衛作の茶碗ともなると大変であるし、古作の銘茶碗の展観ともなると人が群

れをなしてその賑わいは凄まじい。茶を嗜むオバサン達の茶碗への潤沢なるまでの知識力に驚くのである。

「かまぐれ女」と云う川口松太郎作の小説の中で、主人公の松本し乃は東京下町の今戸で瓦や素焼きの火入れなどを焼く家に生まれ育った。或る日小学校の受け持ちの先生から、毎日三度の飯を喰うとき厄介になる茶碗の大切さを聞かされ、なにげなく無関心にすごしているものが、いかに人々の為に役立っているか、ということに「し乃」は感動してその茶碗を作ろうと老陶芸家の許へ弟子入りするという筋書きであったが。

ともあれ毎日朝な夕なに飯を盛る器であつてたしかに目立たない存在である。お皿や小鉢のたぐいは、その日の料理をひき立たせるものであつて、いつも食卓の上で目立つ存在でもある。

しかし飯茶碗に至っては違うのである。掌の上のせてご飯を運ぶのであるから最も触感による良し悪しが判つても



染付なずな手茶碗（景徳鎮）

よいのである。しかし余りにも身近かに在りすぎる為か、毎日使っている自分の飯茶碗の形も、描かれている模様も定かでない人が多いものである。掌にのせる器ならばもう少し興味をよせても良いのではないか、用いやすい大きさ、茶碗の深さ加減とか手の中での重さは無意識のうちに伝わって何時しか愛着ともなつて心地よく生活する一

と駒となるものである。いま「たくみ」の店先きで茶碗を求めようとしたら、どんなものが浮ぶだろうかと書き出してみた。

まず龍門司の三彩、沖繩のマカイ、小鹿田の飛び鉋を選んでみたが、茶碗で心に残るのは景徳鎮で求めた染付なずな手の茶碗である。見事な水引きの成形、絵付けは日に七五〇個を描く老女達の筆さばきに驚いた。その茶碗は私の暮しの中で輝いている。

昔、ボクの子供の頃、正月の朝新しい茶碗と箸と真新しい駒下駄が枕元に揃えてあつたのは子供心に嬉しかった。きのうとは全く異なつた新しい日、真新しい正月を迎えた喜びに満ち溢れたものである。

そんな風習も何時の間にか消え去つて、年末は第九の合唱と紅白歌合戦の喧騒の中で年が明けて了う。単なる暦の目めぐり儀式のようなものになつてしまつたのであるまいかと思うのである。これも齡のせいかもしれないが。

展示会予告

阿部眞士作陶展

会期 六月二十五日(土)～三十日(木)
会場 たくみ二階サロン

滝田項一先生門下の陶芸家には総じて人柄がおだやかで、職人気質の方が多い。ふだんの暮しに潤いを与え座右において親しみ深い器物は、そのような作家の手によつてこそ創られるのだと思う。

眞士さんの作品は、少し青みのある肌合いの白磁で、無地、染付、色絵に流し掛けなど技法は多彩である。いかにも楽しんで作っているかのようで、つい手に触れ使ってみたくなる。

昨年十一月の日本民藝館展では最高賞の民藝館賞を受け、また本年春の国画会展では会員に推挙された。作家としての責任と期待にどう応えるか、精進の跡をご覧いただきたい。

(S)

奥会津たより

二十数年来、三月になると奥会津三島へ出かける。以前は「生活工芸展」の為であり、三年前からは委嘱された「全国編み組工芸品展」の審査の為である。東京ではコートの必要もない暖かい日が続いていても電話で雪の状態を問合せての旅支度となる。



全国編み組工芸品展審査会風景

笠原 勝

今回も例年になく大雪との事。郡山で磐越西線に乗り換え会津若松に向かうと一面の雪。時折烈しく横殴りの吹雪となる。会津若松で只見線に乗り換えても一向に止む気配がない。会津盆地の端、坂下を過ぎ、塔寺、坂本と只見川流域に差し掛かると車窓の側まで



全国編み組工芸品展出品作品

雪が積もり、急峻な斜面からは今にも雪崩て来そうな状態である。（翌日、只見線は雪崩のため会津若松と会津坂下間の折返し運転になってしまった）

第四回を数える「全国編み組工芸品展」は昨年より出品が増え四百点近くになった。福島県喜多方の雄国、宮城県岩出山、長野県山ノ内町など竹細工の産地からのまとまった出品があり、又、アメリカからの出品が一件あった。

伝統の編み組と所謂バスケットリーと呼ばれる分野からの出品があり、審査の折、話題となった。民藝関係で出品して欲しい作り手も居るが、ここでは原則本人出品となっている。各地の民藝店の協力を仰げばまだまだ出品点数が増える可能性があるのだか。

素材で見ると山ブドー皮が圧倒的に多く、竹、胡桃、ヒロロ、マタタビ、藁となる。印象に残る作品もあればまだまだの物もある。だが日本民藝館展とは異なった楽しみもある。

この会と同時開催で町の「生活工芸



雪の只見川

「品展」があり、町民の出品が多数あり活況を呈している。即売もしているので県外からも多くの人々がやって来る。民芸店関係の人たちもここから仕入れていくところがある。出来れば、不出来なところ気が付いたことなど遠慮なく生活工芸館にフィードバックして欲しい。そして品質の向上にご協力いただきたい。



山ブドーさし木の苗床

町は山ブドーの栽培にも着手している。身の回りに在った材料も作り手が増えれば確保が困難になる。材料の枯渇対策である。使えるようになるまでには時間がかかるが、将来を考えれば必要な事である。温室の中に千二百本の苗木が植えられており発根後、地植えされる。順調に育つのを期待する。

また、いい話ばかりでなく、日本各地の自治体が直面する問題がここ三島町にもある。国と県からの補助金の削減である。そして、指定管理者制度の導入である。町がやってきた事業を民間に委託する制度である。すでに三件が対象になっている。人口は二千三百人弱、高齢化率四十二・六%まさしく過疎、高齢化の町である。

三十年前この町でふるさと運動が始まったのも数字の違いはあれ、同じ状況下だった。それを町長はじめ職員一同情熱を持って取り組み、生活工芸運動として結実した。更なる英知と情熱でこの困難を乗り越えてもらいたい。

たくみの大切な仕事に産地との協業がある。育てそして育てられることである。昨年、たくみが創立七〇周年を迎えられたのもそのお陰であると思う。

最後に興味深いアンケート結果があった。町が中学生に行った町づくりのアンケートで、コンビニを作って欲しいという要望が多かった事である。都会でも若い人たちが住まいを探す時、近くにコンビニが在るか否かがポイントになるという。

更なる利便性の為と不便が故の必要性とを考えさせられた。

たくみ歳時記

吹きガラスのセード

明治時代に日本中に電気が普及するようになって、家庭では吹きガラスのセードがもつとも広く使われました。金魚鉢、氷皿、グラスなど手吹きガラスも明治の中頃にはすっかり庶民のものになりました。



吹きガラスのセード2種

しかしこの頃は、吹きガラスは主に作家の仕事となって庶民の日用とは縁が薄くなってしまい残念なことです。

北九州で作られる吹きガラスのセードは、今なお宙吹き技法で一つ一つ作られます。ですからそれぞれ微妙にちがいが、それが温かみとなります。

長年にわたる熟練の仕事ですから価格も安く、ソケット付きで一つ九六〇〇円です。おすすめの一品です。

あとがき

久しぶりに来店された方は、銀座はすっかり変わったといわれる。確かに昔からの老舗は少なく、新築のビルに海外ブランドの高級店ばかりが目立つ。

しかし銀座は明治維新、関東大震災、戦災と三回にわたる災厄を乗り越えていつでも甦ってきた。それを支えてくださったのは日本の伝統ある文化を愛した顧客の方たちである。

たくみも昭和八年十二月の開店以来、多くの方たちに育てられてきた。今号の鈴木訓治さんの一文は戦前の西銀座の様子を記したものだ。(月刊民藝十四年十月号)鈴木さんは、濱田先生の引きで鳩居堂からたくみへ移り、昭和二十七年頃まで、時には柳、濱田先生たちと同行して全国くまなく仕入れに歩いた初期の功労者であった。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)